

「おそろしい話なのよ！」

と、一羽のメンドリが言いました。

そこは、町のはずれで、このお話の出来事のあったところとは、何の関係もない場所でした。

「むこうの、トリ小屋で起こった、おそろしい話なのよ。あたし、今夜は、とつても、一人でなんか、眠れそうもないわ。でも、あたしたちは、こうやってみないつしよに、とまり木の上にかたまっているからいいけれど。」

それから、メンドリは話し始めました。すると、ほかのメンドリたちは毛を逆立て、オンドリたちは、とさかをだらりと垂れました。ほんとにそのとおり！

それでは、初めからちゃんと、お話しすることにし
ましよう。さて、①その出来事の始まりというのは、
町のむこうはずれの、トリ小屋の中で起こったことな
のです。

お日さまがしずむと、ニワトリたちは、とまり木に
飛び上がりました。その中に一羽、まっ白な羽をし
た、足の短いメンドリがいました。卵もきちんきちん
とよく産みますし、メンドリとしては、どこから見
ても申し分のない、立派なメンドリでした。

このメンドリが、とまり木に飛び上がろうとしながら、自分の羽をくちばしでつついたのです。すると、そのひょうしに、小さな羽が一枚、抜け落ちました。

「あら、羽が一枚抜けたわ。」

と、そのメンドリは言いました。

「でも、いいわ。あたしは、羽をつつけばつくほど、きれいになっていくんですもの。」

もちろん、②これは、冗談に言ったことなのです。

なぜって、このメンドリは、仲間の中でも、ほかかな、たち*だったんですから。それに、さっきもお話しましたとおり、大変立派なメンドリだったのです。それから、このメンドリは眠ってしまいました。

辺りは、まっ暗でした。メンドリたちは、体をすり寄せて眠っていました。ところが、そのメンドリのおとなりになっていたメンドリだけは、まだ眠っていませんでした。

このメンドリは、聞いても聞かないようなふりをしていました。誰でも、この世の中を無事に、のんきに暮らしていこうと思えば、そんなふりをしなければならぬものですがね。けれども、別のおとなりさんに、つい、こう言ってしまった。

「ねえ、おまえさん。今言ったこと、聞いた？ 誰って、別に名前は言わないけどね、この中に、③自分をきれいに見せようとして、わざわざ、自分の羽をむしり取るメンドリが、一羽いるのよ。もし、あたしがオンドリだったら、そんなメンドリは、けいべつ**してやるわ。」

ことば * たち：生まれつきの性質。

** けいべつ：相手を、自分より劣っているものとして見下すこと。

ニワトリたちのいるすぐ上^{うへ}に、フクロウのお母^{かあ}さんが、だんなさんと子供^{こども}たちといっしょに、すわっていました。この一家^{いっか}のみんなは早耳^{はやみみ}***でしたから、今^{いま}、おとなりのメンドリが言^いったことを、残^{のこ}らず聞^きいてしまいました。

みんなは、目^めをまんまるくしました。フクロウのお母^{かあ}さんは、羽^{はね}をばたばたさせながら言^いいました。

「あんなこと、聞^きかない方^{ほう}がいいわ。でも、今^{いま}、下^{した}で言^いったこと、聞^きいたでしょう。あたしは、この耳^{みみ}でちゃんと聞^ききましたよ。あなたが元氣^{げんき}でいるうちに、いんなことを聞^きいておかなくちやなりませんものね。

あそこにいるニワトリの中^{なか}には、一羽^{いちわ}だけ、いやなメンドリがいるんですよ。メンドリのくせに、自分^{じぶん}がメンドリであることを忘^{わす}れてしまつてね、自分^{じぶん}の羽^{はね}をみんなむしり取^とって、オンドリの氣^きを引^ひこうつていうんですからね。」

ことば *** 早耳^{はやみみ}：うわさや知らせ^しなどを、早^{はや}く聞^ききつけること。

なまえ
名前：

と
解く

と
いいち
問一

―①の、最初の出来事が起こったのはどこですか。町のどの辺りかも含めて答えましょう。

と
いに
問二

―②について、本文の説明に合うものを一つ選びましょう。
ア 仲間をだまして困らせるために言った。
イ 羽が抜けたことを、ほからかな調子で言った。
ウ 羽を全部抜く計画を、真剣に説明した。
エ オンドリに頼まれた言葉を、そのまま言った。

こたえ

と
いさん
問三

―③の話は、実際の出来事とどう違いますか。羽が抜けたときの様子と、となりのメンドリの話を比べ、五十字以内で書きましょう。

【これまでのお話】

一羽のメンドリが羽をつついたひょうしに、小さな羽が一枚抜けました。冗談を聞いたとなりのメンドリは、「きれいに見せるために、わざと羽をむしった」と伝えました。それを聞いたフクロウのお母さんは、「羽を全部むしって、オンドリの気を引こうとしている」と話しました。

【本文】

「プルネー ギヤルド オー ザンファン—子供たち、気をおつけ。」

と、フクロウのお父さんが、フランス語で言いました。

「そんな話は、子供にはよくないからね。」

「でも、おむかいのフクロウさんには話してやりましょう。あの人は、誰とおつきあいしても、評判のいい人ですからね。」

こう言って、フクロウのお母さんは飛んでいきました。

「ホー、ホー、ホホー。」

と、二羽のフクロウは鳴きながら、おむかいのハト小屋にいるハトに向かって言いました。

「お聞きになった？ お聞きになった？ ホホー。オンドリに見せようとして、羽をみんなむしり取ってしまったメンドリがいるんですって。まだ死にはしないけど、きっとそのうちに、こごえて死んでしまうわ。

ホホー。」

「どこで？ どこで？」

と、ハトがクークー鳴きました。

「おむかいの中庭なかにわだよ。①あたしは、この目めで見たもおんなじなの。へんな話はなしをするようだけど、ほんとにそのとおり！」

「おい、聞いてくれよ、聞いてくれよ。絶対ぜったいに、本当ほんとうの話はなしなんだから。」

ハトはこう言いって、クークー鳴なきながら、鳥飼とりかい場ばへ飛とんでいきました。

「一羽いちわのメンドリがね、いや、話はなしによると、二羽にわだという人ひともいるけどね。その二羽にわのメンドリがさ、ほかの仲間なかまとは違ちがった格好かっこうをして、オンドリの気きを引ひくために、羽はねをみんなむしり取とっちゃったんだってよ。ずいぶん思おもい切きったことを、やったもんじゃないか。そんなことをすりゃあ、かぜをひいて、熱ねつを出だして、死しぬのも当あたり前まえだよ。②二羽にわとも、死しんじまったんだってさ。」

「起きろ！ 起きろ！」

と、オンドリが、大きな声で鳴きながら、板がこいの上に飛び上がりました。まだ眠たそうな目つきをしていましたが、それでも大きな声を張り上げて鳴きました。

「かわいそうに、三羽のメンドリが、一羽のオンドリを好きになって、そのために死んだんだとき。みんな、自分の羽をむしり取ってしまったんだ。実に、情けない話じゃないか。おれは、③自分一人の胸にしまっておきたくない。みんなに知らせてやろう。」

「みんなに知らせてやろう。」

と、コウモリはチーチー鳴き、メンドリはコッコと鳴き、オンドリはコケッコ、コケッコと鳴きました。

「みんなに知らせてやろう。みんなに知らせてやろう。」

こうして、このお話は、トリ小屋からトリ小屋へと伝わって、とうとうしまいには、そのお話の出た、もとのところへ戻ってきました。

ほんとにそのとおり！

だい かい ぜん かい
第2回 / 全3回

なまえ
名前：

と
解く

問一

①について、本文に合う読み取りを一つ選びましょう。
ア 羽を全部むしるところを、実際に見ていた。
イ メンドリの死を確かめてから、知らせた。
ウ 聞いた話を、自分で見たことと同じように確かなものとして伝えている。
エ 何も知らないのに、ハトに見に行ってもらおうとしている。

こたえ

問二

②について、フクロウとハトでは、メンドリが死ぬことをどう違って伝えていますか。四十字以内で書きましよう。

問三

③のようにはせず、オンドリはこの話をどうしようと思いましたか。

--

【最初に起きたこと】

一羽のメンドリが、自分の羽をくちばしでつついたひょうしに、小さな羽が一枚抜けました。メンドリは「羽をつつけばつくほど、きれいになる」と冗談を言い、その後、眠りました。

【ここまでで伝わった話】

話は、メンドリからフクロウ、ハト、オンドリたちへと伝わりました。その間に、羽を全部むしったことになり、メンドリの数も増え、死んだことにまでなりました。そして、もとのトリ小屋へ戻ってきたのです。

【本文】

そしてそのときには、

「五羽のメンドリがいてね。」

ということになっていました。

「それが、一羽のオンドリを好きになって、誰がそのために一番気を使って、やせてしまったかを見せようとしてさ、みんな、自分の羽をむしり取ってしまったんだって。それから、血まみれになって、けり合いをしてるうちに、とうとう倒れて死んでしまったんだね。一家の不名誉*と、恥辱**は、この上もないし、飼主にとっても、大きな損害さ。」

ことば * 不名誉：評判や名誉を傷つけること。

** 恥辱：恥をかかされること。

ところが、あのメンドリは、小さな羽が一枚抜け落ちた。ちてなくなっただけなのですから、①まさか、これが自分の話とは知るはずありません。それに、このメンドリは、立派なメンドリでしたから、こう言いました。

「あたし、そんなメンドリは、けいべつしてやるわ。でも、そういう人たちって、ずいぶんいるものね。そういうことは、隠しておいてはいけないわ。ひとつ、②この話が、新聞にのるようにしてやりましょう。そうすれば、国じゅうに広まるわ。そのくらいの目にあつたって、そのメンドリたちや、家族のものには、仕方がないことだわ。」

こうして、③このお話は新聞にのりました。それから、本にも印刷されました。ほんとにそのとおり！小さな一枚の羽が、しまいには、五羽のメンドリになれるんですよ。

なまえ
名前：

と
解く

と
いいち
問一

①で、自分から始まった話だと気づかなかったのはなぜですか。自分に起きたことと、聞いた話の違いにふれ、六十字以内で書きましょう。

と
いいに
問二

②で、新聞にのせることで、この話がどこまで広まると考えましたか。

と
いさん
問三

③となる前、最初のメンドリはどう行動しましたか。一つ選びましょう。

ア 自分の話だと気づき、間違いを直そうとした。

イ うわさに出てくるメンドリを探し、事実を確かめた。

ウ 自分の冗談が原因だと説明し、広めないように頼んだ。

エ 自分の話だと気づかず、ほかのメンドリの悪い行いとして広めようとした。

こたえ

問3

解答例：実際はつついたひょうしに抜けたのに、きれいに見せるためにわざとむしった話になっている。

本文のどこを見るか

羽をつついたひょうしに一枚抜けた場面と、傍線③。

考え方

偶然に抜けたことが、わざとむしる行動として伝わっています。

採点ポイント

①つついたひょうしに抜けた、②わざとむしった話になった、の二点で正答。「きれいに見せるため」は省略可。「話があげさになった」だけでは、具体的な違いが不足します。

問2

正解：イ

本文のどこを見るか

「冗談に言ったこと」と、その後の「ほがらかな、たち」。

考え方

言葉だけで判断せず、語り手による説明も読みます。

誤答の理由

ア：だます目的はありません。ウ：羽を全部抜く計画はありません。エ：オンドリに頼まれたとは書かれていません。

問1

解答例：町のむこうはずれの、トリ小屋の中。

本文のどこを見るか

傍線①に続く「町のむこうはずれの、トリ小屋の中」。

考え方

冒頭で話を聞いている場所と、最初の出来事が起こった場所を区別します。

採点ポイント

「町のむこうはずれ」と「トリ小屋」の両方が必要。「町の反対側のはずれにあるトリ小屋」も正答。冒頭のメンドリがいる場所とは別です。

問3

解答例：みんなに知らせようとした。

本文のどこを見るか

傍線③の直後「みんなに知らせようとした」。

考え方

自分だけが知っている状態にせず、ほかにも伝えようとしています。

採点ポイント

「ほかの鳥にも広めようとした」も正答。「本当かどうか確かめようとした」は本文にありません。

問2

解答例：フクロウはこれから死ぬと話し、ハトはもう死んだと伝えている。

本文のどこを見るか

フクロウの「まだ死にはしないけど」と、ハトの傍線②。

考え方

「これから」の話が、「もう起きた」話に変わっています。

採点ポイント

①フクロウはこれから死ぬと話す、②ハトはすでに死んだと話す、の二点で正答。「予想」「事実」という語は不要。羽数が増えたことだけでは、尋ねた違いへの答えになりません。

問1

正解：ウ

本文のどこを見るか

「これまでのお話」と、傍線①の「見たもおんなじ」。

考え方

実際に見たことと、見たのと同じだということを区別します。

誤答の理由

ア・イ：羽をむしる場面や死を自分で確かめた場面はありません。エ：確認を頼んでいません。二羽のどちらの発言かを特定する必要はありません。

問3

正解：エ

本文のどこを見るか

自分の話だと気づかない説明と、「隠しておいてはいけないわ」という発言。

考え方

話のもとになったメンドリ自身まで、ほかのメンドリの話として広めようとしています。

誤答の理由

ア・ウ：自分から始まった話だと気づいていません。
イ：本人を探して確かめてはいません。物語中の実際の出来事と、うわさの内容を分けて読みます。

問2

正解：国じゅう

本文のどこを見るか

傍線②の後「そうすれば、国じゅうに広まるわ」。

考え方

トリ小屋同士で伝わっていた話を、さらに広く知らせようとしています。

採点ポイント

「国中」「国全体」も正答。「世界じゅう」は本文より範囲を広げています。

問1

解答例：自分は羽が一枚抜けたただけなのに、聞いた話では五羽のメンドリが死んだことになっていたから。

本文のどこを見るか

最初の出来事の再掲と、五羽のメンドリについて戻ってきた話。

考え方

自分の体験と、聞いた話とが大きく異なっています。

採点ポイント

①自分は羽が一枚抜けただけ、②聞いた話では複数のメンドリが死んでいる、の対比で正答。羽を全部むしったこと・けんかなどを全て書く必要はありません。一方だけなら部分的な理解です。

使い方・出典・教材制作

ほんとにそのとおり！／小学5・6年生向け

印刷と使い方

全15ページ。児童用は1～11ページ、解答・解説は12～14ページ、使い方・出典は15ページです。A4横向き・片面・実際のサイズ（100%）で印刷します。本文を読む順に上へ並べ、問題をその下に置きます。

取り組み方

小学5・6年生向け、全3回です。各回の本文を最後まで読んでから、3問に取り組みます。本文は手元に置き、読み返しながら答えます。第2・3回には教材用の振り返りを添え、以前の回の記憶だけに頼らず読めるようにしています。

問題と採点

各回に選択・短答・記述を1問ずつ掲載しています。記述の字数は句読点も一字と数えます。解答例と同じ表現でなくても、採点ポイントの中心となる内容が書けていれば正答です。短答は字数を指定していません。

読み方のポイント

実際の出来事と、聞いて伝えた話とを比べます。死やけんかは、広まったうわさの内容です。羽数だけでなく、行動の目的や、まだ起きていないことが起きたこととして伝わる変化にも目を向けます。教訓を一つに決める問題ではありません。

作者・訳者

『ほんとにそのとおり！』
ハンス・クリスチャン・アンデルセン
Hans Christian Andersen
矢崎源九郎 訳

出典情報

青空文庫「ほんとにそのとおり！」
[青空文庫 図書カード](#)（作品情報・本文）
底本：「人魚の姫 アンデルセン童話集Ⅰ」新潮文庫、新潮社。1967年12月10日発行／1989年11月15日34刷改版／2011年9月5日48刷。
入力：チエコ／校正：木下聡
青空文庫ファイル作成：2021年5月27日

本文の加工について

ご提供の訳文全体をもとに、現代表記・句読点・一部語句・段落を整えました。会話や場面は残し、ふりがな、注釈、傍線、設問を加えています。各回冒頭の振り返りは教材制作側が付け加えた説明です。

教材制作

家スタ！／学習舎シオン

新しい教材のご案内

新しいおはなし読解プリントは、【家スタ！】公式アカウントで先行配信しています